

般若心経を生きる

酒井大岳著



若波羅蜜多是大神咒是大明咒是無上咒是無
等咒能除一切苦真實不虛故讚般若波羅
蜜咒即說咒曰羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯

【書評】酒井大岳著『般若心経を生きる』水書坊刊

B6判 二四六ページ 定価 二六二円(税別)



酒井大岳師

酒井 董美^{ただよ}
川崎市の畏友、荒金民雄
氏が前々から講演の素晴ら
しさをうかがっていた著者の
本である。

著者・酒井大岳師(一九三
五～二〇二〇)は群馬県吾妻

郡東村生まれ。曹洞宗長徳寺住職だった。筆者と同じ「酒井」姓で。生年も同じであるが、親戚ではない。さて、般若心経と聞くと、よく知られた「色即是空／空即是色」の語句が、真つ先に思い浮かぶが、難しそうだとそれだけで敬遠しそうになる。著者はその般若心経の持つ本質を、誰でもありそうな日常に起こる普段の出来事から、読者に自然に納得できるように説いたのがこの本である。

内容であるが、月刊仏教『ナム』(水書坊)誌上に一九五七年一月号から一年半にわたって連載したのをまとめたものという。

次いで本書の構成を見ると、「まえがき」の後に「般若心経(仏説摩訶般若波羅蜜多心経)」がルビつきで紹介され、続いて著者によるその現代語訳を見開き二ページでまとめ、読者の便宜を図っている。

本文は四章に分かれているので順に示しておく。第一章・あるいて求める、第二章・出会いを生かす、第三章・山河は語らねど、第四章・“行”よりほかなし。

著者の寺は貧しかった。したがって家からの仕送りもなく行商のアルバイトで各地を歩き、資金稼ぎをし、ようやく駒澤大学仏教学部禅学科を卒業。その後、仏教書を読み、俳句を作ったりしながら、七年間を横浜で過ごす、生活費を稼ぐため、鶴見、保土ヶ谷、川崎で書道教室を開いていた。そこで出会った大城信男という高校生に、本物の僧侶になるよう激励され、群馬県の生家の寺に帰る。

吾妻高校分校の書道講師となるが、破天荒な授業で生徒と心を通わしたり、俳句を通して、人生の師を得たりしている。その一人、真如会主幹の紀野一義氏は著者を「師は若い頃、車を駆って四谷の草堂に私の話を聴き、再び車を駆って群馬の寺に帰り若い妻に聴いたことすべてを語ってから眠った」と述べている。

また入院中の妻を訪ねるため自身の軽自動車運転し、他の車と激突、大怪我をして入院。運転免許も取り上げられるなど、生活の中から学んだこれらの具体的な体験を述べながら般若心経の心を説いているので、本書は読者に抵抗なくその真髄を感得させられるのである。(元島根大学法文学部教授)